

原子力はヘラクレスか？ 福島復興と原子力の美学

ノーベル文学賞受賞者川端さんの受賞講演は「美しい日本の私」でした。

そこでは、道元・明恵・良寛・一休という人達の歌とともに、宗教・哲学の思索をする心について述べられています。

また、《「雪・月・花」という四季の移りの折々の美を現す言葉は、日本においては山川水木、森羅万象、自然のすべて、そして人間感情をも含めての、美を現す言葉とするのが伝統なのである。日本の茶道も雪月花の時、「最も友を思う」のが根本の心で、茶会はその「感会」であり、小説千羽鶴は今の世間に俗悪となった茶に疑いと警めを向けた作品である。(講談社現代新書 0180 「美しい日本の私」より)》と述べています。

一方で、一見、四季折々の美とはかけ離れているように見える「原子力」に「美」は存在するのでしょうか？

日本の原子力開発における、新型転換炉ふげん・高速増殖炉もんじゅ、という命名は、日本人の人間感情が含まれていて、心の安寧を願った宗教感覚を通じて、言葉とともに美術としての仏像美を連想させ、「美しい原子力」という言葉があってもよいかと思えます。

しかしながら、他国よりも低い原子力発電所の稼働率や、3・11事故発生という事実は、かつて世界最高レベルと称賛された日本の原子力技術が、不断の安全性の向上やそれに基づいた稼働率の改善を目指す能動姿勢から、いつのまにか「安全デアル・世界最高の技術水準デアル」という安全神話トイウヨウナモノを信憑する「静止画状態」の姿勢に陥ってしまって、更なる安全向上が国際的にも遅れた可能性を伺わせます。

原子力のダウンストリームについても、半世紀が経過してなお中間整備のままという静止状態になっているようにもみえ、文明の美としては未完成という現状にあるのでしょう。

福島の復興を願い、原子力が21世紀の文明の旗手としてふさわしいものであるならば、関係者共々それ自体が美しく、またそれが常に高められてゆくことを期待している次第です。

川端さんは「和言愛語」という揮毫をいくつか残しています。

私事ですが、

明治生まれの棟梁であった父は、家を建てる毎に桜を植え、時にマンドリンで「美しき天然」を弾いていました。おくり名は寛良でした。

川端さんによれば、僧 良寛の辞世は、

「形見とて 何か残さん春は花 山ほととぎす 秋はもみじ葉」 です。